

日本語日本文学科（旧国文学科）半世紀の歩み

大谷女子大学文学部国文学科（現大阪大谷大学文学部日本語日本文学科）が創設されたのは、大阪府富田林市錦織で本学が開学した昭和四十一年（一九六六）四月のことである。以来本学科は、言葉や言葉に関わる文化を学ぶ場として半世紀以上の歴史を歩み、平成三十一年（二〇一九）三月までの五十三年間に累計六千六百名を超える卒業生を世に送り出してきた。

昭和四十一年（一九六六）一月二十五日付の「大学開設認可書」^{〔1〕}によれば、開学当初の学部は文学部の一学部のみである。そのもとに国文学科・英文学科が組織され、入学定員は各五十名だった。英文学科は学内組織の改組改編により現在は存在していない。したがって本学科は、開学以来の体制を引き継ぐ、本学では唯一の学科ということになる。

昭和四十年代、教員および学生は漸次増加した。はじめに開学当初の教員構成を示せば、次のとおりである（昭和

四十一年度大谷女子大学教職員学生住所録の記載に基づく）。

（教授） 乗岡憲正、原田芳起、三上章

（助教授） 佐藤美知子、水原渭江、山口達子

（専任講師） 福田晃

（兼任講師） なし

これに対し、開学から七年目にあたる昭和四十八年（一九七三）の教員構成は次のとおりである。下記の一覧は、学校法人大谷学園の歴史をまとめた『尋源 大谷学園九十年記念』（学校法人大谷学園、平成十一年）で公にされている。

（教授） 乗岡憲正、遠藤嘉基、小久保実

（客員教授） 犬養孝、山内潤三

（助教授） 佐藤美知子、岩瀬博、中村宗彦

（専任講師） 小椋嶺一、西奥鳴琴

（兼任講師） 伊藤敏子、乾裕幸、白田甚五郎、大藤幹

夫、野上俊子、横山正^②

当時の研究者は専攻領域が広い。例えば開学当初、国文学科主任^③をつとめた乗岡憲正教授は、折口信夫の民俗学を継承し、『万葉集』や口承文芸・芸能など、伝承文学に関わる論考を幅広く発表している^④。付言すれば、乗岡教授は大谷女子大学学歌の作詞者でもあり、しかも授業では主に『源氏物語』を担当した。また佐藤美知子助教授（昭和四十九年より教授）は『万葉集』研究を中心としながら中世和歌や木下利玄等の近代歌人に関する論考、近現代短歌論を公にしたことに加え、自身が短歌を詠んだことから機関誌『かつらぎ』（後に『かづらぎ』^⑥）を編集、さらには後述する万葉植物園造園の監修なども行った^⑦。

このように個々の教員が多様な活躍をする一方、右の教員は日本語学および日本文学を専攻する各時代・各分野の研究者をまんべんなく配置した構成となっており、こうした体制が昭和四十年代すでに確立していたことが知られる。

草創期の学科の歴史で特筆すべきことは、他にもいくつかある。大谷女子大学国文学会の創設（昭和四十一年）および『大谷女子大國文』の創刊（昭和四十六年）、教員と

学生で構成された各領域の研究会等がそれである。

大谷女子大学国文学会は教員と学生を正会員とし、その両者の協力によって運営された。乗岡教授が筆を執った「創刊の辞」（『大谷女子大國文』創刊号、昭和四十六年三月）にそってまとめれば、本国文学会が発足したのは、学科創設と同じ昭和四十一年四月のことである。学会活動の目的は国文学へのより深い認識と研究を目指す点にあり、春秋二季における学会行事や四つの文学研究会の運営を主な活動内容とした。

そして昭和四十五年三月に第一期卒業生を世に送り、学科創設五年目を迎えたことを契機として、本国文学会で急速に機関誌発刊の機運が熟したという。

その名も『大谷女子大國文』と銘打って、創刊号を刊行するに至ったことは、まことに同慶に堪えない。その表題は平板ながら、むしろ本学における国語・国文学の論文誌であることを端的に表明するものであると考える。

尚、今後において本学に提出せられる卒業論文は、近代文学の分野にのみ片寄ることなく、古代から近世への古典文学並びに国語学の分野にわたって、その問

題意識が広く、且つ平均してゆく傾向の培われることが望ましく思われる。このような配慮が、いささかなりとも関係の学界、また国語・国文学の研究に志す同系列の大学の学生にとつても研究の資料として役立つ得るならば、望外の喜びである。ここに本学のみならず、広く世の御批判と御好意とを期待して、逐次充実に計って行きたいと念願する次第である。

右の「創刊の辞」にあるとおり、本誌は学生の卒業論文が学界に寄与することを強く意識しており、実際に学生の論文も教員の論考と並んで収録された。それは卒業論文のなかでも特に優秀と認められたものであり、創刊号で言えば刈屋博美・西野登志子・仲尾さつきの諸姉の論考がそれにあたる。何人かの卒業生の証言によれば、教授陣の論考とともに自身の卒業論文が『大谷女子大國文』に掲載されることは、学生にとつて非常に大変ではあるが、同級生をはじめ誰からも一目おかれることだったという。現在それらの卒業論文を読んでみても、担当教員の指導のもと長い時間をかけて諸資料を丹念に整理し、学界に新見を示さんとした力作がそろっている。なお本誌には卒業論文に加え、本学大学院の学生が書いた論文が掲載されることもあ

った。

現在は残念ながら、こうした伝統が途絶えている。そこにはいくつもの理由がある。学生の意識の変化は一つの要因だが、それだけではない。そもそも現代の大学生は、社会状況の影響もあって非常に多忙である。一例を挙げれば学生は、一年生の時から就職活動の準備を始める必要がある、正規の授業時間外でもSPI対策や自己分析をはじめ各種セミナーへの参加が求められている。四年生時には何ヶ月も就職活動をこなしてはならない。じっくり一つの言葉の歴史をたどる、あるいは一つの作品を読み込むといった時間の余裕が遺憾ながら少なくなってきたのである。一方學術の世界においては研究の高度化と細分化が進み、研究対象によっては専門の研究者であっても新しい発見をすることがきわめて難しい場合がある。卒業論文が本学科の學術誌に掲載されなくなったのは、以上のようないくつかの要因が重なっている。しかし編集委員会としては、学生の論文投稿に門戸を閉ざしているわけではない。むしろまったく逆であつて、掲載に値する力作が投稿されることを強く望んでいる。

草創期の学科の歴史に話を戻せば、大谷女子大学国文学

会は、毎年春季には本学科教員および学外の講師による学術講演会、秋季には学術上有意義な見学会や文学散歩などの活動を行った¹²⁾。また教員と学生で構成する研究会は学科創設以来重視してきた活動で、原則として、会ごとに作品やテーマを決め、毎週一回昼休みに集まって輪読するスタイルが採られた¹³⁾。「大谷女子大学国文学会報」第一号（昭和四十八年九月、以下「会報」と略称）所収「研究会だより」には、次の活動が紹介されている。

劇文学研究会（乗岡憲正先生指導、『菅原伝授手習鑑』輪読、浄瑠璃のレコード鑑賞等）

和歌文学研究会（佐藤美知子先生指導、和歌の研究方

法・鑑賞力の修得、万葉植物園の造園協力等）

説話文学研究会（岩瀬博先生指導、「一寸法師」や

『閑居友』輪読、愛媛県広見町の昔話集作成）

中世文学研究会（山口逸子先生指導、『平家物語』輪

読、京都大原への研究旅行）

俳文学研究会（山口逸子先生指導、芭蕉の俳文輪読、

伊賀方面への研究旅行）

近世文学研究会（小椋嶺一先生指導、井原西鶴と本居

宣長の著作の輪読）

近代文学研究会（小久保実先生指導、宇野千代の研究）

語文研究会（中村宗彦先生指導、『古事記』輪読、出

雲風土記の故郷である大社・松江方面への研究旅行）

当初は四つだった研究会が昭和四十八年の時点では八つに増えており、その発展ぶりがかがわれる。各研究会によって参加人数は異なるが、中世文学研究会を例にとれば会員数は二十名だったという記録が残っている¹³⁾。研究会は主に学生主体で運営され、上級生と下級生が学年の垣根を越えて交流する場でもあった。

第一期卒業生の回想によれば、開学直後は次のような様子だったという。

一回生の当時は、文学部総数で、二百名しかいませんでした。学舎は、コの字型の建物と寮だけで、それでも、講義ごとに教室を移動すれば、空いている教室の方が多いと言うぐらい広々していました。そして、直接教えて下さる教授たちは、もちろんのこと、事務の方々から、食堂のおばさんたちまで顔や名前を覚えて下さって、親しくお話のできる雰囲気で、とても楽しい四年間であつたと思います¹⁴⁾。

教員が学生の顔をほとんど覚えていたことについては、山中功一初代教務部長も同じ証言を残している。¹⁵ 本学は現在も教員と学生との距離が近い大学である。そうした伝統は開学当初から続いていた。

なお一泊二日の新入生研修旅行（後のフレッシュマン・キャンプ）が昭和四十六年に始まっている。¹⁶ この行事は長年本学の特長であったが、令和二年度からはフレッシュマン・ミーティングと名称を改め、宿泊はともなわないかたちで、従来のフレッシュマン・キャンプを発展・拡充させる予定である。

昭和四十七年（一九七二）には、万葉植物園の造営が始まった。指導にあたったのは、先述の佐藤美知子助教授である。この植物園には『万葉集』に登場する約百六十種の植物のうち約百五十種が植えられた。¹⁷ 後に佐藤教授がまとめた大谷女子大学万葉植物園案内書「万葉の草木」（昭和六十二年五月刊）には植物園の草木の一覧と『万葉集』の例歌が収められ、園内の植物を観察する手引きとなっている。万葉植物園は一時期荒廃したことがあり、生育環境の関係もあって、すべての植物が今も残っているわけではない。¹⁸ だが平成十八年（二〇〇六）薬学部薬学科の設置にと

もない薬草園の設置が必要となり、薬草園の機能をもたせるかたちで万葉植物園が再整備された。現在は各学部の学生が課題に取り組む場として、また学内の憩いの場として活用され、秋には先生の引率のもと園児がドングリを拾う光景も見られる。

図書館をはじめとするキャンパス整備の進展とあいまって、本学科は順調に発展した。昭和五十年代には教員数・学生数がともに増加。在学生が一学年二百名以上となる時期もあった。歴代の大谷女子大学卒業アルバムには、ゼミごとの卒業論文一覧が収録されている。それで見ると、指導教員一人に対し学生が二十名以上いるゼミもあった。¹⁹ 昭和五十年代から六十年代にかけて、在籍する教員は専任教員・非常勤講師を含め二十五〜三十名前後という大所帯となっており、日本語を専攻する複数の教員に加え、各時代の日本文学につき韻文・散文の専任教員が原則として各一名ずつ配置された。この時期に、日本語や日本文学の形成に大きな影響を与えた中国文学の研究者が本学科の教員に加わったのも、学科の発展と軌を一にしている。²⁰ さらに昭和五十年（一九七五）に大学院文学研究科（国語学国文学専攻）修士課程、昭和五十三年（一九七八）に同博士

課程がそれぞれ設置された。

いささか手前味噌の記述となるが、本学科に籍を置いた専任教員のなかには、各学問領域を代表する一流の研究者も含まれる。お名前を逸する非礼を恐れ、一人一人の研究者名を挙げることは控えさせていただくが、特に同じ領域を専攻する読者の方であれば、本特輯号所収『大谷女子大国文』『大阪大谷国文』総目録」を通じ、右の事実はすぐに見てとれると考える。あわせて御高覧いただければ幸いである。

このように本学科は順調な発展を遂げてきたが、社会状況の変化によりやがて大きな転機が訪れる。知られているように一九九〇年代以降、長引く経済不況により実学偏重の傾向が強まり、全国各地で日本語学や日本文学に関わる研究機関が改組・改編、場合によっては廃止された。こうした危機的状況を受けて、本学でも学部等の再編が幾度も行われ（年表参照）、入学定員も見直すことになる。そして平成十年（一九九八）には本学科に副専攻制（コース制）が導入され、日本語教育学の専門家を迎えた上で、日本語教員コース、図書館コース、文化財コースの三コースを設置した。ここで言うコース制とは固定的・限定的なコ

ース専攻制ではなく、学生が日本語教員・図書館司書・芸員等のスペシャリストを望むならば国文学科設置の各コースにそった授業科目を履修することによって深い知識を得ることのできるシステムである。²¹

そして平成十二年（二〇〇〇）国文学科から日本語日文学科に、また大谷女子大学国文学会から大谷女子大学日本語日文学会にそれぞれ名称変更し、本学科は新たな教育体制をスタートさせた。少子化、若者の文学離れ、この現象と表裏する実学（資格取得）への傾向、ひいては長引く経済不況という背景のもと、若者たちの多様なニーズや社会の新しい動向に対応するために学科名称等を変更し、教育改革を進めたのである。改革の具体的内容としては、先述のコースを発展・拡充させ、基幹コースとして日本語日文学科コースを位置付けるとともに、日本語教育コース、国語教育コース、文献文化財コース、コンピュータ表現コースの四コースを設置した。この副専攻制度により、学生が卒業研究の作成を進める一方、さまざまな資格を得したり、さらに幅広く学んだりすることを可能にしたのである。コンピュータ表現コースは、ホームページ作成や新聞発行など情報発信や自己表現の方法を学習・実践する

ため設置された。⁽²²⁾

これ以外にも、実習型の講義であるフィールドワークの開講（平成八年度より）、複数の専任教員による社会人向けの連続講座（平成十年度より）、大学院生と学部生両方が受講できる「共通科目」の開講（平成十二年度より）など、学部生や大学院生はもちろん、地域の方々にも対象を広げ、教育体制の発展・拡充がなされた。

こうした動向は現在も続いている。平成十八年（二〇〇六）薬学部の新設にあわせて、本学は大学名称を大谷女子大学から大阪大谷大学に変更し、全学部男女共学となった。それにもない、大谷女子大学日本語日本文学会を大阪大谷大学日本語日本文学会に、学術誌『大谷女子大國文』を『大阪大谷國文』にそれぞれ名称変更するとともに、日本語日本文学科に書道教育コースを置いた。

こうした一連の改革が行われた時期、すなわち一九九〇年代の後半から二〇〇〇年代にかけては、本学科にとつて試練の時代だった。入学定員を減らさざるを得なくなったこと、教育活動の重要な一環になった研究会が次第に行われなくなったこと、学生の書いた卒業論文が『大谷女子大國文』や『大阪大谷國文』に見られなくなったこと等、

この時期には学科の歴史の上でいくつもの大きな変化が生じている。

ただここで特筆すべきなのは、大学を取り巻く劇的な環境変化に対応するため教育改革を進める一方で、言葉や言葉に関わる文化を学ぶ学科としての芯の部分を一貫して堅持したことである。全国の大学で人文系学部の統廃合が進むなか、本学科は、組織上の基本的な枠組みとしては一度の学科名称変更のみでこの危機的状況を乗り越えた。そして試練を克服したからこそ今がある。もしその時、学科の枠組みそのものを解体するような改組にまで踏み込んでいたら、現在とはまったく別の状況になっていただろう。

平成二十四年（二〇一二）にはコース編成を改め、日本語日本文学コース、日本語教育コース、国語教育コース、書道教育コース、企画・編集コースを設置した。このうち企画・編集コースは先述のコンピュータ表現コースをさらに見直したものであり、コース履修を通じて、出版業界や企業等での広報活動に即戦力として役立つ人材育成を目指している。また図書館司書に強い興味を抱く学生が多い状況を考慮して、本学科に図書館情報学の専門家を迎え、平成三十年（二〇一八）図書館情報コースを設置。コース体

制のさらなる充実をはかった。

こうした継続的な教育改革を通じ本学科は、名称変更はあったものの、開学当初の体制を引き継ぐ、本学では唯一の学科としての歴史を歩んできた。現在の入学定員は五十名であるが、入学者数は安定的に推移しており、大手予備校の発表するデータを見ても偏差値は上昇傾向にある。令和元年（二〇一九）現在の学生数は、一〇四年生で計二百三十一名である。男女比は年度によって異なるが、現時点では男子学生が約四割、女子学生が約六割を占める。一方の教員は日本語学、上代から近現代に到る日本文学、中国文学、日本語教育学、図書館情報学の専任教員十名が在籍²³。これに現在学長をつとめる浅尾広良教授（中古文学）、教育学部の大槻美智子教授（日本語学）、笹川博司教授（中古文学）を加えると、関連分野の専任教員は計十三名となる。一学年に二百名以上学生が在籍した時代と比べると、教員数・学生数ともに少なくなっているが、専任教員約十名に対し一学年の入学定員五十名という人数構成は、少人数教育ならではのきめ細やかな学生指導を可能にしている。また学科草創期以来の伝統を引き継ぎ拡充させた右の教員構成を通じ、学生は卒業研究を作成するにあたり、

自分の好きな分野を自由に選べるようになっていり、本学科は現在アドミツション・ポリシー（入学者受入れの方針）において、次のような人材育成目標を公にしている。

本学は、建学の精神である「報恩感謝」に基づく教育理念として、「自立・創造・共生」を掲げています。

この教育理念のもと、日本語日本文学科は、日本語および日本文学に関する知識と幅広い文学的素養を身につけ、他者との相互理解を深めて、協働して諸課題を解決することができると人材の育成を目指します²⁴。

右の方針にそって現代社会のさまざまなニーズにこたえる学生を育てることは、本学科にとって必須の課題である。我々は常に新たな社会的動向に対応していかなければならない。

平成三十年（二〇一八）十一月に中央教育審議会がとりまとめた「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン」では十八歳人口が減少するなかでの高等教育機関の整理統合の方向性が示された²⁵。さらに翌三十一年（二〇一九）二月に出された「高等教育・研究改革イニシアティブ（柴山イニシアティブ）」では、大学側が学生の学力の伸び

を確認することを徹底し、教育の質を保証することを強く求めている⁽²⁶⁾。加えて令和二年度からは高等教育機関の授業料無償化が実施される予定であるが、学生が給付を受けるためには一定水準以上の成績をおさめなければならぬ。そのことと連動し大学としては、成績評価のさらなる厳格化等の措置を講じることも必要とされている。

こうした新たな動向に対応することは全学的な課題であり、本学科もその影響を受けることは当然予想される。教職員はもちろん、本学科に在籍する学生も、次々と変化する状況に柔軟に対応することが求められるであろう。ただ先述のとおり、日本語日本文学科は多くの試練を乗り越えてきた。半世紀以上にわたる歴史を受け継ぎつつ、今まで通り学生に真摯に向き合いながら質の高い教育活動を行い、次の五十年の新たな歴史を歩んでいきたいと考えている。

『大阪大谷国文』編集委員会

※以上の記述のうち、特に注記を施さなかった内容については、以下の資料を適宜参照した。

・創立六十年記念誌出版部会『尋源 大谷学園六十年』

(学校法人大谷学園、昭和四十四年)

・創立九十周年記念誌編集委員会『尋源 大谷学園九十周年記念』(学校法人大谷学園、平成十一年)

・学校法人大谷学園『尋源 大谷学園100周年記念誌』(学校法人大谷学園、平成二十年)

・「大谷女子大学国文学会報」第一―二十五号(昭和四十八年九月―平成十六年一月)

・大谷女子大学および大阪大谷大学の卒業アルバム(昭和四十五年―現在)

・大阪大谷大学・沿革

(出典) <https://www.osaka-ohkami.ac.jp/about/history.html>

注

(1) 『尋源 大谷学園九十周年記念』四五三頁参照。学部・学科の構成や入学定員については「大谷女子大学学則」(『尋源 大谷学園六十年』一三五―一四一頁)にも同じ内容の記載がある。

(2) 昭和四十八年七月十四日付「大谷女子大学通信」(『尋源 大谷学園九十周年記念』四六八―四六九頁から転載)。転載にあたり博士号等の記載は省略した。また『尋源 大谷学園九十周年記念』には兼任講師欄の記載に「伊藤俊子」

とあるが、正しくは「伊藤敏子」と判断されるので訂した。

(3) 『尋源 大谷学園六十年』三三九頁、『尋源 大谷学園九十周年記念』四五六頁参照。

(4) 「乗岡憲正先生の略歴並びに業績」および「献呈の辞」『大谷女子大国文』第二十三号、平成五年三月 参照。

(5) 『尋源 大谷学園六十年』三三三～三三四頁、『尋源 大谷学園九十周年記念』四五七～四五九頁参照。

(6) 具体的な書誌は次のとおりである。大谷女子大学短歌クラブ編『かつらぎ』第一～十六号（昭和四十五年三月～昭和六十年三月）、大谷女子大学国文学科佐藤研究室かつらぎ会編『かつらぎ』第十七（一）～二十七（四）号（昭和六十年十一月～平成九年三月）。この雑誌には会員のつくった短歌に加えて、安田章生先生の特別短歌、小島憲之先生、川端善明先生の特別論文が掲載されるなど、充実した誌面となっている。

(7) 「佐藤美知子先生の略歴並びに業績」および「献呈の辞」『大谷女子大国文』第二十八号、平成十三年三月 参照。

(8) 「会報」第一号（昭和四十八年九月）に「国文学会改正会則」の一部が載っており、その第四条に「正会員 本国文学科の専任教員、卒業生・在学生全員」との条項が定められている。

(9) 論文題目等は、本特輯号所収「『大谷女子大国文』『大阪大谷国文』総目録」参照。

(10) 現在のところ、第三十九号（平成二十一年三月）に掲載された小島文子氏の論考が、本誌に掲載された最後の卒業論文となっている。

(11) 乗岡憲正氏「『国文学会報』創刊に寄せて」および「研究発表・講演会及び見学会について」〔「会報」第一号、昭和四十八年九月〕参照。

(12) 研究会の設置については、昭和四十～四十六年に大谷女子短期大学および大谷女子大学で教鞭を執られた福田晃氏が貴重な証言を残している。やや長文になるが、以下引用する。

昭和四十年、わたくしは大学院博士課程を終了すると同時に、縁あって大阪の大谷女子短期大学に赴任した。それは翌年の女子大学設置のための準備員としての採用であった。その年は、先輩教授とともに、文学部国文学科の図書を購入から教学大系の原案づくりまでにかかわったのである。それは大学紛争が激化していた時代で、教授と学生との関係が不穏な状態にあった。その教授と学生との信頼関係を教学のなかでいかに築くかが、女子大学でも課題となった。わたくしは、五人の専任教員が正式の講座・演習のみならず、それぞれの自主的ゼミを開設することを提案した。白田先生（白田甚五郎先生―引用者注）の説話研究会の方法に学んだのである。翌年、大谷女子大学が開学、わたくしは自主ゼミとして説話文学研究会を用意し、

およそ二十名余の新入生を入会させたのである。そこで、國學院と同じく、毎週一回、書かれた説話の輪読のかたわら、昔話の入門書の講義を進めた。やがてその年の八月下旬には、十日間にわたり、岡山県真庭郡八束村・花園村において、昔話の聞き取り調査を実施したのである。それは、指導の教員と学生との共同作業であり、合宿生活でもあり、每晚実施される報告会は、確かに教員と学生との信頼を獲得する絆ともなったのである。(福田晃氏「昔話から御伽草子へ―室町物語と民間伝承―」三弥井書店、平成二十七年、三六九頁「あとがき」より引用。傍線も引用者による)

(13) 「会報」第二号(昭和四十九年九月) 参照。

(14) 芝本邑子氏(旧姓田中)「随想」(「会報」第十七号、平成元年十月)。

(15) 「山中功一教務部長の回想」(『尋源 大谷学園九十周年記念』四五六頁) 参照。この回想によれば、開学当時は国文学科・英文学科ともに学生を智組・信組の各二クラス、計四クラスに分け、A教室での朝礼、次いで教員による三分間の講話があったという。

(16) 『尋源 大谷学園九十周年記念』四六七頁参照。第六期生・長阪和子氏(旧姓川田)「女子大国文学科の思い出」(同書七五八頁)には、この昭和四十六年時のオリエンテーション(多武峯へのバス旅行)の回想がつけられている。

(17) 『尋源 大谷学園九十周年記念』四七四頁、高橋秀二郎氏「万葉集の植物について」(大谷女子大学万葉植物園案内書「万葉の草木」、昭和六十二年五月) 参照。『尋源 大谷学園九十周年記念』四七二頁には万葉植物園の造営開始が昭和五十七年と記載されているが、「会報」第一号(昭和四十八年九月)「研究会だより」所収、佐藤先生指導の和歌文学研究会の記事に「特殊研究活動としては万葉植物園の造園に協力し」とあるので、昭和五十七年造営開始という右の記述は誤りである。

(18) 藤原茂樹氏「万葉植物園の楽しみ」(「会報」第二十四号、平成十二年三月)、池田千尋氏「今もむかしも好きな場所」(本特輯号所収) 参照。藤原教授は上代文学が専門で、本学科では古代文学研究会を担当。その研究会の活動として毎週水曜日、植物園委員と一緒に園内の万葉植物を前掲「万葉の草木」と照らし合わせ、「その中で確実に五十五の植物と、九種のたぶんそうであろうというのを確認」したという。

(19) 卒業アルバムに卒業論文一覧を載せる習慣は、昭和四十六年度から平成二十二年度まで続いた。これとは別に、本学科卒業生の書いた卒業論文、卒業研究および本学研究所修了生の書いた修士論文、博士論文の題目と氏名は「大谷女子大国文」「大阪大谷国文」にすべて掲載している。

(20) 中国文学が専門の山内春夫先生が昭和五十四年に着任。この年、専任教員は計十三名となった(「会報」第七号、

昭和五十四年十月)。

(21) 『尋源 大谷学園九十周年記念』四九五頁参照。

(22) 『尋源 大谷学園九十周年記念』五一―五二頁参照。

(23) 令和元年(二〇一九)十二月現在、本学科の専任教員は次のとおりである。学科の歴史をまとめるこの文章の趣旨に鑑み、あえて記しておきたい。宇都宮啓吾教授(日本語学)、鈴木利一教授(上代文学、学科長)、四重田陽美教授(中世文学)、横田隆志教授(中世文学)、大坪亮介専任講師(中世文学)、高橋圭一教授(近世文学)、東典幸教授(近現代文学)、稲垣裕史准教授(中国文学)、樋口裕子教授(日本語教育学)、木下みゆき教授(図書館情報学)。

(24) 大阪大谷大学文学部日本語日本文学科ホームページに全文を掲載している。

(出典) <https://www.osaka-ohfumi.ac.jp/department/literature/japanese/>

(25) 文部科学省「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)(中教審第211号)」

(出典) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/roushin/1411360.htm

(26) 文部科学省「高等教育・研究改革イニシアティブ(柴山イニシアティブ)」

(出典) http://www.mext.go.jp/a_menu/other/1413322.htm

(27) 文部科学省「高等教育無償化の制度化に向けた方針の概要」

(出典) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/huankengen/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/12/28/1412286_001.pdf

日本語日本文学科（旧国文学科）年表

※以下の沿革は、本学の主な歴史と対照させるよう構成した。ゴシックは本学科において特に重要なできごとを指す。

昭和四十一年（二九六六）

大谷女子大学文学部（国文学科・英文学科）を大阪府富田林市錦織に設立

大谷女子大学国文学会創設

昭和四十二年（二九六七）

文学部に教員養成課程（中学校一級・高等学校二級）の設置が認定される

昭和四十五年（二九七〇）

第一期卒業

文学部に幼児教育学科を増設

昭和四十六年（二九七一）

『大谷女子大国文』創刊

昭和四十七年（二九七二）

万葉植物園造成

昭和四十八年（二九七三）

文学部に司書課程、学芸員課程を設置

図書館竣工

昭和五十年（二九七五）

大学院文学研究科（国語学国文学専攻、英語学英米文学専攻）修士課程を設置

昭和五十三年（二九七八）

大学院文学研究科（国語学国文学専攻、英語学英米文学専攻）博士課程を設置

平成元年（二九八九）

志学館竣工

平成二年（二九九〇）

文学部に教員養成課程（中学校一種・高等学校一種）が課程認定される（再認定）

平成十年（二九九八）

国文学科に日本語教員コース、図書館コース、文化財コースの三コースを置く

文学部に司書教諭課程、社会教育主事課程を設置

平成十二年（二〇〇〇）

国文学科を日本語日本文学科に名称変更

大谷女子大学国文学会を大谷女子大学日本語日本文学会に名称変更

日本語日本文学科に日本語日本文学コース、日本語教育コース、国語教育コース、文献文化財コース、コンピュータ表現コースの五コースを置く

文学部に文化財学科、コミュニケーション関係学科を増設
英文学科、幼児教育学科の名称を英語英米文学科、教育福祉学科に変更
文学部教育福祉学科を教育福祉学部教育福祉学科に改組

平成十六年 (二〇〇四)

大学院文学研究科に文化財学専攻の修士課程・博士課程を増設
人間社会学部人間社会学科を設置

平成十七年 (二〇〇五)

教育福祉専攻科を設置
英語英米文学科を英米語学科に名称変更

平成十八年 (二〇〇六)

大学の名称を大阪大谷大学に変更し、全学部男女共学となる
大谷女子大学日本語日本文学会を大阪大谷大学日本語日本文学会に名称変更
『大谷女子大國文』を『大阪大谷國文』に名称変更 (刊行は平成十九年三月)

平成二十一年 (二〇〇九)

日本語日本文学科に書道教育コースを置く
日本語日本文学科に教員養成課程 (書道、高等学校一種) の設置が認定される
薬学部薬学科を設置

平成二十四年 (二〇一二)

教職教育センターを設置
日本語日本文学科のコース編成を改め、日本語日本文学コース、日本語教育コース、国語教育
コース、書道教育コース、企画・編集コースの五コースを置く

平成二十六年 (二〇一四)

教育福祉学部教育福祉学科を教育学部教育学科に名称変更
人間社会学部にスポーツ健康学科を設置
英米語学科を募集停止

平成二十八年 (二〇一六)

文化財学科を歴史文化学科に名称変更
ハルカスキャンパスを開設
教育福祉専攻科を教育専攻科に名称変更

平成三十年 (二〇一八)

日本語日本文学科に図書館情報コースを置き、計六コース編成とする
大学院文学研究科の文化財学専攻を歴史文化学専攻に名称変更